飛翔拳の李通

「違うぞ、馬鹿者！」
　老師の罵声が飛ぶ。　同時に老師の持つ棍の先も飛んでくる。
　李通は棍を胸に受けて引っくり返る。
「痛いなあ。　老師、もう少し優しく教えていただけませんか」
　土を払いながら李通が不満の声を漏らす。
「優しく教えて、ちっとも身につかなかったから、厳しくしておるのだ」
「ははは。そういえばそうでしたね」
　また棍が飛んできて、立ち上がった李通の太腿を打つ。李通の顔が苦痛に歪む。
「何がおかしい。　貴様は真面目に飛翔拳の修行をする気があるのか」
「もちろんです。　だからこそ老師の下で、何年も教えを請うておるのではありませんか」
「ならばなぜ、未だに『雨燕式』を会得できぬ。　弟子の中でお前だけだぞ。 ここから先に進んでおらんのは」
　飛翔拳は『形意拳』の流れをくむ、中国北派拳法のひとつである。
この拳法の修行は、基本の型、応用の型をまず学び、次に対打（組手）を学ぶという順に進んでいく。
李通は五年ほど修行をしているが、基本の型のひとつ『雨燕式』がどうしても会得できない。
同時期に修行を始めた者は、とっくに応用の型に進んでいる。　それどころか、後輩となる弟子にも追い越されている始末である。
「もう一度、わしが演武するからよく見ておれ」
　そう言って、老師は『雨燕式』の演武を始めた。
「どうだ。　違いがわかったであろう」
一通りの型を演じた後、老師は李通に向かって言った。
「私と同じに見えますが」
　李通の言葉を聞いて老師は、はぁとため息をつく。
「お前には、この型の名を理解する必要がありそうだな」
「どういうことでしょう」
「『雨燕』という意味を、よーく考えてみるのだ。よいか」
「はぁ。　今ちょっと考えましたが、わかりませんが」
「たわけ！　よく考えろと言ったであろう。　誰が思いつきを答えよと言った。　ええい、貴様と話していると心の臓に悪い」
「もうお年なのですから、もっと穏やかな心を持ちませぬと」
「穏やかにさせておらんのは貴様だ、馬鹿者！」

　道場からの帰り道。
李通は老師の言った言葉を思い出していた。
（『雨燕』の意味を考えろって言ったってなあ）
　空を見上げてみる。　先ほどまではよく晴れていたが、黒い雲が増えてきている。
（ひと雨くるかもしれんなあ。　春先は天気が変わりやすい）
　燕が数羽、弧を描いて飛び回っているのが見える。
（雨と燕。　さっぱりわからん）
　などと考えているうちに、ぽつりぽつりと雨粒が落ちてきた。　雨はすぐに結構な量になった。　李通は大きな木の下で雨宿りをすることにした。
　一羽の燕が、李通のすぐ近くの枝にとまった。　ずぶ濡れになった身体を震わせて、水をはじきとばしている。
その様子をじっと見ていた李通は
「これだ！」
　と思わず大声をあげた。
李通の声に驚いた燕は、さっと飛び立っていった。

　翌日、李通は自信たっぷりに、老師の前で『雨燕式』を演武して見せた。
「いかがですか、老師」
　上気した顔で李通はたずねた。　ようやくこれで基本の型は卒業だ、と思っていた。
　ところが老師の答えは
「なんだそれは？」
　であった。
「雨燕式ですが？　私なりに意味を考えた結果です」
「いったいお前は、何をどう考えたのだ？」
「ですから雨の中の燕です。　濡れた羽から水をとばすため、全身を震わせるのです。
私はその様子を見ました。　ですから震えるような動きをいれてみたのです」
「たわけ、まったく違うわ！」
「ええっ？」
「雨が降る前、エサとなる虫が低いところに集まるため、燕は低く飛ぶであろう。要するに、姿勢を低くして速く動け、というのがこの名前の意味するものなのだ。お前は本当にどうしようもないやつだな」
　老師の解説を聞いている間、李通は
（たった二文字でそんなもんわかるわけないだろう。　だったらもっと分かりやすい名前にしてくれよ）
と思ったが口には出さなかった。

終わり